

改訂情報

21/12/2017 V9.67 → V9.68

1. 「患者対照研究」のメニュー画面上に「7. データの95%信頼区間の算出」を作成した。これにより、データファイルを読み込み、データ内変数の算術平均値とその95%信頼区間値、幾何平均値とその95%信頼区間値を算出できるようにした。併せて、(最終的に使用者が決定すべきことであるが) 当該変数を以後の解析において無変換値と対数(底10)変換値のいずれで行うのが良いかについて示唆する。このヘルプファイルの当該プログラムの説明箇所には詳細がある。
2. SPBS立ち上がり画面の写真の変更月を若干変更した。
3. 「Spearman順位相関係数」で用いる順位付けデータを解析結果として表示させることが可能となり、具体的な方法は当該プログラムの説明箇所に記されている。

10/01/2014 V9.66 → V9.67

1. 「データ変換・加工」のメニュー画面上の「編集」の「分割変数」の「1変数によるN分割」において、4分割した場合、「四分位(Quartile)法」を選択できるように修正した。これを用いると、境界上限値が25、50、75パーセントイル値となる。但し、データファイルのサンプル数が100未満の場合には、この選択はできない。
2. 「データ変換・加工」の中で変数名やデータ数値を変更し「上書保存」する際、既に起動している別のプログラム(例えば、EXCEL)が同ファイルを開いていると、この修正ファイルを「上書保存」できずに終了していた。今回の改訂では、EXCELを一旦終了した後に、メッセージボックスの「再試行」ボタンを押すとデータファイルを上書保存することができる。
3. 「重回帰分析」の中に、回帰係数の95%信頼区間を算出するプログラムを加えた。
4. 「相関分析」で偏相関係数を算出する場合、これまで選択できる変数の数が最大12であったが、サンプル数が多い場合には、“[サンプル数]-[変数の数]>3”まで変数を選択できるように変更した。なお、この偏相関係数を算出する際に、使用する変数の要約値(平均値、標準偏差、最小値、最大値)も同時に算出される。
5. 「Spearman順位相関係数」でも、偏相関係数(Spearman partial rank correlation coefficient)を算出できるように変えた。その際、使用する変数の要約値(中央値、最小値、最大値)も同時に算出される。

28/06/2013 V9.65 → V9.66

1. 「2群間有意差検定」の2つのデータファイル読み込時に発生しうる問題点を修正した。
2. 「共分散分析」2つのデータファイル読み込時に発生しうる問題点を修正した。
3. 印刷プログラム<SPBS PRINTER>の解析結果を印刷する際、画面に表示された結果に加筆・削除しても最初の解析結果しか印刷されなかった。今回の修正で、新規に加筆・削除された結果が印刷できるようにした。
4. 「データ変換・加工」のメニュー画面上の「編集」の「Data削除」の「変数並替え」の“Old variable No.”の表示方法を改良した。
5. データ入力画面の色の配色を再考し、「データ入力」画面の背景色を深緑から白地(これに伴い数字は黒色)に変更した。

24/10/2012 V9.64 → V9.65

1. 「多重ロジスティック分析」の解析結果を表示する際、<SPBS PRINTER>プログラムでは一部文字列が次行に跨ることがあった。この不具合を解消した。
2. 「ホッケースティック回帰分析」の解析結果の表示では変数番号が選択された変数の番号と異なることがある。この変数番号の表示が異なる旨を解析結果内に明示するようにした。
3. 解析結果をテキストファイル（拡張子が<.txt>の形）で保存した場合、この保存した解析結果を表示するためのプログラム<TEXTFILE PRINTER>を加えた。このプログラムの起動は、個々の解析を終了した際に現れる解析結果表示プログラムの画面上に「Textfile PrinterE）」とあるので、ここをクリックすると現れる。あるいは、SPBS統計パッケージのメニュー画面上の<Print>中にある「Textfile Printer」をクリックする。なお、TextfilePrinterを起動すると、SPBS統計パッケージのメニュー画面上にある「Option」の「クリップボードの確認」は「チェック不可」に自動的に変更される。
4. 反復測定データの多群比較（=多重比較）のプログラムにおいて、Glantzの方法の個々の群間の有意性検定結果を $P<0.05$ 、 $P<0.01$ のように表記していたが、BonferroniとSidakの自由度調整済みP値（確率値）を表示するように変更した。

23/06/2012 V9.63 → V9.64

1. 「2群間有意差検定」のデータファイル読込時に発生しうる問題点を修正した（これはデータファイル名が長すぎる時に発生していた）。
2. 「共分散分析」のデータファイル読込時に発生しうる問題点を修正した（これはデータファイル名が長すぎる時に発生する可能性があった）。
3. 「プロフィール分析」のデータファイル読込時に発生しうる問題点を修正した（これはデータファイル名が長すぎる時に発生する可能性があった）。
4. 「2群間の多重比較」のデータファイル読込時に発生しうる問題点を修正した（これはデータファイル名が長すぎる時に発生する可能性があった）。
5. 「一次回帰式」のデータファイル読込時に発生しうる問題点を修正した（これはデータファイル名が長すぎる時に発生する可能性があった）。

10/05/2012 V9.62 → V9.63

1. メニュー画面「Tools」の「Datafileの確認」を用いると、データファイル読込時に発生しうる問題点を画面に表示するようにした（画面上の「File診断の消去/表示」をクリックすると、問題点のレポート画面を閉じて、従来のデータ、平均値、標準偏差等を表示する）。
2. 各々の解析プログラムからデータファイルを読込む時、ファイル名に関わる問題点をメッセージボックスに表示するように修正した。
3. メニュー画面「Tools」の「Datafileの確認」を「Datafileの診断」と命名法を変更した。これにより、EXCEL CSVデータファイル内の不具合（SPBS統計パッケージ上での読み取りエラー）の可能性を診断できるようにし、その種の不具合が全く見つからない場合には、メッセージボックスに不具合の可能性がないことを表示するようにした。
4. ヘルプファイル（プログラム使用説明書）をプログラムの改訂に沿う形で修正した。

02/04/2012 V9.61 → V9.62

1. 「データ変換・加工」の中の「統計」の「全体の統計量」で表示されたデータを「印刷」ボタンを押すと直接プリン

ター印刷できるように修正した。これまでは「ワードパッド」を介して印刷することができたが、ワードパッド画面から印刷する際に、文字種を「MS ゴシック」、印刷文字サイズを「9」に毎回変換する時間を節約できる（また、行間隔が狭めてあるので、印刷枚数を節約することができる）。

2. 「Tool」の「Datafileの確認」から「印刷」ボタンを押すと、これまでワードパッド画面が現れ、印刷はワードパッドを介して行っていた。ここでも、文字種「MS ゴシック」、文字サイズを「9」に変換しなくては、印刷画面が乱れて汚くなる。これを避けるために、直接SPBSが指定した形でA4紙に印刷できるように修正した。
3. SPBS統計の立ち上がり画面に癒やしの画像を加えた。
4. 「二元配置分散分析」および「反復測定データの有意差検定（多重比較）」の際に、従来はサンプル数が10以上であれば箱ヒゲ図をペイント上に描くことが可能であった。今回の改訂により、サンプル数が5~59の場合に限り、箱ヒゲ図の代わりに点連結図（Spaghetti plot）も選択できるようにした。同一サンプルの時間的経過を表したい場合に有用と考えられるが、この点連結図を選択した場合、平均値や中央値は表示されない。
5. 正規性を検討する一法として、これまでSPBS統計の中で「ズレ確率」と表現していたものを「ズレ尺度」と命名変更した。これは数理統計学に基づく確率値（Probability）を意味していない。したがって、この種の誤解を避けるために「ズレ尺度」（あるいは「ズレ指標」）と呼ぶことにした。この「ズレ尺度」の定義（算出方法）は「基本統計量－正規性の検討」の28頁に記している。
6. 解析プログラムに移動してファイルを入力した後、実質的な解析を何もせずに終了すると、これまで印刷プログラム<SPBS PRINTER>が一旦起動し、解析プログラム名、起動日時、入力ファイル名を表示していた。この印刷プログラムの無用な表示を回避し、メニュープログラムに戻るよう修正した。

16/12/2011 V9.60 → V9.61

1. 新規に作成された印刷プログラム<SPBS PRINTER>の書式様式に合わない「数量化Ⅲ類」プログラムを修正した。なお、解析プログラムでは<項目数>と<項目数－1>の2種類が選べるようにしてあるが、前者の場合、固有値算出の際に収束しないときは計算が中断する。このような時はメッセージボックスが現れるよう修正したので、<項目数－1>に変更して解析することをお勧めする。
2. 全変数間の「Spearman 順位相関係数」を算出することができる。このとき欠損値を含む変数が存在すると、（1つも欠損値を含まない新たな仮想ファイルを作成するので）元と異なるサンプル数が表示されるし、それ以後の2変数間の相関係数はその仮想ファイルを基に算出される。このようにサンプル数が元ファイルと異なる場合に、その旨を解析結果に印字するようにした。なお、全変数間の順位相関係数を算出しない場合には、選択した2変数内の欠損値を除いて順位相関係数と単相関係数を算出する。
3. 「解析方法の選択」に新たな例題を加えた。
4. SPBS のプログラムメニュー画面上にある解析結果を表示する「Print(P)」の中には、これまで「MS WordPad」と「MS Word」を用意していた。しかしながら、MS Word では機動に時間がかかるので、WordPad あるいは、SPBS 内臓の印刷プログラム<SPBS PRINTER>に変更した。
5. 全ての解析プログラムが、終了すると印刷プログラムに立ち寄るように設計していた。しかしながら、解析を行わないでメニュー画面に戻る際に立ち寄るとその分時間を要するので、解析結果仮想ファイル（spbstemp.tmp）が作成されないときは直接メニュー画面に戻るよう修正した。
6. Windows の Visual Studio 2005 で作成した dll ファイルを Visual Studio 2010 でコンパイルし直した。これにより、従来の Windows XP/Vista の他に、Windows 7 (x32 および x64) 版でも SPBS が動作することを確認した。このため、Windows

95/98/ Me/2000/NT に対応しない可能性がある。

7. SPBS 統計のプログラムは立ち上げ時左上に常駐していたが、見にくいとの評があった。今回の改訂ですべてデスクトップの中央に表示されるように変更した。

05/12/2011 V9.59 → V9.60

1. 「基本統計」で「日本地図 47 都道府県別表示」の作画をする際、これまで論文用の白黒印刷を意識して「塗りつぶし」画法によって 5 段階変化を示すようプログラムされていた。今回の改訂では Windows の PowerPoint の使用を意識して、従来の「塗りつぶし」の他に、「白→薄橙色→橙色→赤色→紫色」と「白→薄水色→水色→青色→群青色」の 2 種類の色調変化として表示できるように修正した。
2. 「2 群間の有意差検定」、「共分散分析」、「相関分析」、「Spearman 順位相関係数」、「一次回帰式」の作図において、記号「●」の色を、黒、青、赤から選べるように修正した。なお、初期設定の段階で色調を固定していないので、SPBS 画面のボタン（あるいはリストのレ点）を確認して希望の色を選択することになる。
3. 「プロフィール分析」の作図画面で、2 群の平均±標準偏差の表示がこれまで記号の違いだけであったが、解りやすい表示とするために 1 群は黒色「●」、2 群は青色「■」で表すように修正した。
4. Windows の Visual Studio 2002 で作成した dll ファイルを Visual Studio 2005 でコンパイルし直した。

14/10/2011 V9.58 → V9.59

1. 各種の統計解析プログラムのデータファイル入力後、「数値変換またはサンプル制限を行いますか？」で“Yes”をクリックすると、データ入力時と同じ一覧表が現れる。この時、各々の変数データが正規分布か否かを表上の「統計」の「正規性の検討」で調べることができる。これまでは、「無変換」、「ルート変換」、「対数変換」した場合の正規性検討結果が表示されたが、「ルート変換」は減多に使うことがないので「無変換」と「対数変換」に局限した。ここで表示される数値が 0.05 より小さいならば、Q-Q プロットによる検討で極めて直線性が高いことを意味する（詳細は「基本統計」の解説を参照）。上記のように変数“PSDif”は、対数変換の数値が 0.0079 で“◎”が付いており、かつ無変換の数値が 0.05 以上であるので、この変数データは“正規分布近似を必要とする解析方法”では対数変換後に解析を実行することが望ましい（この場合、表上の「編集」内の「数値変換」にある「対数(10)」を選択すると、当該変数の値は‘底を 10 とする対数値’に変換され、解析することが可能となるが、元のデータファイルへの書き込みはない）。
2. 統計解析を終えると、これまではメニュー画面に戻った。今回の改訂で、全解析結果をメニュー画面に復帰する前に現れるようにした（但し、Windows「メモ帳」で開ける範囲の解析結果の場合に限られる。これまで通り Windows の「ワードパッド」でも解析結果を閲覧できる）。この画面で解析結果をファイルに保存することも可能である。同時に、この表示プログラムに合うように、幾つかの解析結果のレイアウトも修正した。なお、このプログラムではプリンタの設定ダイアログボックスが現れるので、コンピュータに接続してあるプリンタのいずれにも対応する筈である。
3. SPBS では、EXCEL ファイルの数値部分をコピーしてクリップボードに移した後、そのクリップボードデータを SPBS 用ファイルとして取り込むことができる。この取り込みプログラムでは、新規に変数名を入力する必要があるが、この操作をウっかり忘れてしまうようである。これを防止するために、データ取り込み直後にプログラムが自動的に起動し、変数名の入力を要求するように修正した。

15/09/2011 V9.57 → V9.58

1. 「基本統計量」で、Q-Q プロットを表示しないようにチェックすると、箱ヒゲ図が図示される（但し、箱ヒゲ図はサ

サンプル数が 20 未満では表示されない)。

2. 前バージョンまで、EXCEL の CSV ファイルの最下段サンプルが全て 0 の場合、サンプル数が実際の数より 1 つ減少していた (2 値変数ばかりのファイルでは全て 0 のデータもあり得ることから、この最下段のサンプルデータを消去することは計算ミスに繋がる)。この不具合を修正した。
3. クリップボードデータが SPBS のメニュープログラムで捕捉されても、解析プログラムに移動させると、クリップボードから消去されるように変更した。
4. 「ファイルの作成」のデータ保存時に、拡張子 (.csv) を書き忘れても EXCEL CSV ファイルが作成されるように修正した。これまでは、拡張子を書き忘れると SPBS ファイル (.doc) として保存されていた。

05/10/2010 V9.56 → V9.57

1. 「比率の検定」の「SMR の算出」で、Rothman 法による 95% (99%) 信頼区間を算出できるようにした。
2. 「比率の検定」の「SMR の算出」で、曝露群、非曝露群の症例数と人年数が明らかな場合の相対危険度 (Relative risk) とその Wald limit (95%信頼区間) を算出する方法を Rothman の本から抽出し、プログラム化した。
3. 「基本統計量」の 95 パーセンタイル値が奇数のサンプル数のとき 5 パーセンタイル値を示していたのを修正した (サンプル数が偶数の時には問題ない)。
4. 「2 群間の有意差検定」、「共分散分析」、「一次回帰式」、「2 群間の多重比較」、「プロフィール分析」で、データファイル名が長すぎる時に発生する不具合を修正した。但し、データファイル作成時に可能な限り短いファイル名を付けることが望まれる (「.csv」を除き、半角文字数で 12 以下であることが望まれる)。

15/05/2010 V9.55 → V9.56

1. ヘルプファイルを全て PDF 版に改訂した。したがって、Adobe Reader (あるいは Adobe Acrobat) がインストールされていないとヘルプファイルを見ることができなくなった。
2. 「解析方法の選択」画面を全面的に改定した。
3. 「一元配置分散分析」で、3 変数のデータファイル入力時に起きる不具合を修正した。
4. Windows 7 で動作確認を行い、いずれのプログラムも動作するようであった。

01/01/2010 V9.54 → V9.55

1. 「2 群間の有意差検定」の Wilcoxon の順位和検定の際、2 群の各々の中央値を表示するようにした。
2. 「2 群間の比較」のヘルプファイルの説明を一部変更した。
3. 「一元配置分散分析」の中の Kruskal-Wallis rank-sum test 用に、各群の中央値を表示するようにした。
4. V9.51 で有意性 P 値を小数点以下第 4 位に変更したが、以後の修正で第 3 位になっていた。これらを全て見直し、改めて第 4 位になるよう修正した。
5. 「平面分布図」プログラムでは 5 段階表示であったが、6 段階 (×) にした。
6. プリンターが USB 接続のものに対応できるように説明を加えた。

10/06/2008 V9.53 → V9.54

1. 臨界濃度を計算できるようにするため、Hockey Stick 回帰モデルを追加した (「一次回帰式」の場所)。
2. Hockey Stick 回帰モデルの文献を追加した。
3. ROC 曲線の感度・特異度が 0 または 1 の時の 95%信頼限界値の算出法を変更した。

4. 「割合の区間推定」の算出法を一部変更した（分母値が小さい場合、F 値を用いて算出）。
5. 対応のない 2 × 2 分割表検定で「感度・特異度」を算出できるようにした。
6. 上記 3～5 の説明をヘルプファイルに加えた。
7. 「2 群間の有意差検定」のデータの要約に（Wilcoxon 検定に対応させるため）中央値を加えた。

27/11/2007 V9.52 → V9.53

1. Windows Vista に対応するため、「Help(H)」の中のヘルプ情報を PDF ファイルとして読めるように変更した。
2. メインメニュー<Tools>の「コピー」で CSV ファイルのコピー不具合を修正した。
3. ヘルプファイルの説明を一部修正した。
4. Benchmark dose に関する 2007 年までの最新文献を追加した。

15/04/2005 V9.51 → V9.52

1. 「相関分析」の中に「平面分布図」プログラムを新規に作成した。これにより、1～5 群の集団を○、●、□、■、△で一平面上に表示することが可能となった。このプログラムは通常の X、Y 変数の他に集団を表す 0～4 からなる変数（計 3 変数以上）を要す。各々の集団の相関係数とその有意性を作図画面に同時に表示することができる。全サンプル数の回帰直線およびその 95%信頼区間を表示することが可能である。
2. 「基本統計量」の 95 パーセントイル値の不具合を修正した。この値は以前正しく出力されていたが、Visual C で DLL ファイル作成時に誤った可能性がある。
3. Benchmark dose に関する 2006 年までの最新の文献を追加した。

15/11/2003 V9.50 → V9.51

1. 「患者対照研究」の「離散データ」保存形式を SPBS 用から CSV 用ファイルに変更した。
2. 「クロス集計」の分割ファイルの保存形式を SPBS 用から CSV 用ファイルに変更した。
3. 「内的整合性検討」の合成ファイルの保存形式を SPBS 用から CSV 用ファイルに変更した。
4. 「主成分分析」の因子得点のファイルの保存形式を SPBS 用から CSV 用ファイルに変更した。
5. 「因子分析」の因子得点のファイルの保存形式を SPBS 用から CSV 用ファイルに変更した。
6. 「Spearman 順位相関係数」の確率値は、サンプル数によらず、近似 t 値から算出するように変更した。検定表がある場合には、その結果もカッコ付きで表示するようにした。
7. 解析結果の確率 P 値をこれまでの小数点以下第 3 位までから第 4 位までに変更した。これにより、Lancet 用の投稿論文の統計基準を満たすことができる。

15/07/2003 V9.49 → V9.50

1. SPBS 統計パッケージの V9.5 を記念して、表示画面の図柄を変更した。
2. 「一次回帰式」の母回帰係数の検定結果を図示した後、結果の一部を画面に出るようにした。また、同上のプリンター出力時の図（第 1 群の黒丸の位置）の不具合を修正した。
3. 「Windows XP での画面の不都合の回避方法」を「SPBS の概要」に記した。
4. 臨界濃度算出のための Benchmark Dose Calculation のプログラムを追加した。この使用法は、ヘルプファイル「Benchmark Dose Calculation」（V9.48）に記載されている。

29/10/2002 V9.48 → V9.49

1. 「データ変換・加工」と「データの作成」の画面データの移動にマウスの右・中ボタンを使用できる。V9.47時の変更では、右ボタンクリック時に右1頁、中ボタンで下1頁の移動が可能となった。今度のV9.49では、マウスの中ボタンで移動方向を指定し、右ボタンで指定方向へ1頁分の移動を行う。この場合、<カーソル移動>と同じように方向を上下左右のいずれにも選択できるように修正した。
2. 従来、データファイルのオープンはSPBSファイル（「XXXX.doc」と「XXXX.txt」）が中心であった。今回以後、データファイルのオープンはCSVファイル（EXCELのカンマ区切りファイル）を中心にする。SPBSファイルは、従来通り「ファイルの種類」から「*.doc」を選択すれば、オープンできる。
3. EXCEL(CSV)を中心に再編することに伴い「データ作成と編集」の中を修正した。「1. データファイルの作成と修正」は「1. データファイルの作成」に限定した。「7. データファイルの編集と加工」は「7. データファイルの修正と編集」とした。「3. データファイル固定長⇄SPBS変換」は「3. データファイル固定長⇄EXCEL変換」とした。
4. 「データ変換・加工」において、<編集>の中に<変数移動>ボタンを加えた。これにより、特定変数を任意の位置に移動することが可能となった。
5. メインメニューの<Tools>の「コピー」にSPBSファイルの他にCSVファイルも加えた。

28/10/2002 V9.47 → V9.48

1. 解析プログラムにおいて使用中のファイル名をタイトルバーに表示できるようにした。但し、3個以上のファイルを同時に開く場合には最初と最後の2つのファイル名を表示する。
2. 統計に関する「参考図書および文献」（ヘルプファイル）において最近出版されたものを追補した。特に、今後使用される可能性の高いBenchmark Doseに関する論文・参考書を加えた。
3. 「各種検定・分析」の「比率の検定」の中に、「SMRの有意性検定」を加えた。
4. 「ヘルプファイル」の表現（SPBSの概要）の一部を修正した。
5. 計算結果に計算日時を表示するように修正した。

13/10/2002 V9.46 → V9.47

1. 「データ変換・加工」、「データの作成」の画面データの移動にマウスの右・中ボタンを使用できる。右ボタンで右1頁、中ボタンで下1頁の移動が可能となるが、変数・サンプルの数が少ないと作動しない。但し、「中ボタン」の設定のないマウスでは下1頁の移動は不可能である。
2. 待ち時間の長い計算において、時間が掛かる旨（「Coffee break」）を表示するようにした。これは反復計算を含むプログラムの場合であるが、それにもかかわらず数分以内であることが多い。
3. 「一次回帰式」の横軸データを対数・ルート変換した時の作図表示方法を一部修正した。同時に、「変換後値」および「変換尺度」の意味を当該ヘルプ画面の中に書き加えた。
4. SPBS「メニュー」のメニューバーの表示を（位置を変えないまま）日本語から英語に変更した。

13/07/2002 V9.45 → V9.46

1. 「SPBS⇒固定長ファイル変換」実施時、固定長ファイルを確認できるようにした。

2. 「解析方法の選択」の中の「次例題」と「終了」ボタンの位置を逆にした。
3. 「多重ロジスティック分析」で「データ制限」使用後の不都合を修正した。
4. 「データ変換・加工」の基本統計量の印刷時の不都合を修正した。「名前を付けて保存」する時に拡張子の記入がないと、エラーメッセージを出すようにした。さらに、CSVファイルの読み込み中に時折発生する不都合を修正した。
5. 基本解析プログラムの起動画面においても「File確認」ボタンを追加した。

02/06/2002 V9.44 → V9.45

1. 「二元配置分散分析」の箱ヒゲ図をサンプル数が9以上で描けるようにした。
2. 「共分散分析」の一部プログラムをC言語に書き替え、演算速度を向上させた。
3. 「重回帰分析」の独立変数の増減をマウスで行うことができるようにした。なお、以前は「減らす（増やす）独立変数の番号」をキーボードで入力していた。
4. 「データ作成と編集」の「2. データファイルExcel(CSV)⇔SPBS変換」を修正した。SPBSファイルの変数名が半角34文字を越えると、Excelファイル作成時に不都合が生じる。
5. データファイル作成時の初期値として、全てのカラムに「-999」（欠損値）を入れた。カラムの数値が「-999」の場合には、欠損値として処理する。

30/03/2002 V9.43 → V9.44

1. ヘルプファイル内に、SPBSのバージョンアップ時の改訂情報を記すようにした。
2. 「Spearman順位相関係数」および「共分散分析」の欠損データ処理を修正した。なお、データファイルに欠損データ(-999)がない場合、この種の問題は発生していない。
3. 「Cox比例ハザードモデル」の“95%C.V.”（95%信頼区間）を「95%C.I.」と修正した。
4. 「Weibull生存分析」の“95%C.V.”を「95%C.I.」と修正した。
5. 「一元配置分散分析」の箱ヒゲ図をサンプル数が9以上で描けるようにした。

01/03/2002 V9.42 → V9.43

1. 「反復測定データの多重比較」の図に、箱ヒゲ図を描けるようにした。
2. データファイル読み込み時の「Data制限」で「削除」操作における不都合を修正した。
3. 「データファイルの変換・加工」用ヘルプファイルを見やすくした。
4. 多変量解析プログラムの起動画面に「File確認」ボタンを追加した。
5. 「データの変換・加工」内の変数・サンプル削除の際、削除部分を一目でわかるようにした。